

グローバル COE「生体シグナルを基盤とする統合生命学」拠点リーダー 宮下保司先生
2009年9月8日（火）医学部教育研究棟7階

インタビュアー：辻真吾、酒井麻衣（生命科学ネットワーク）

今回は、グローバル COE「生体シグナルを基盤とする統合生命学」の拠点リーダーである、医学部の宮下先生にお話を伺いました。先生は、生命科学ネットワークの前身である生命科学教育支援ネットワークの運営委員をされていたこともあり、お話の途中で生命科学ネットワークへのご意見もいただきました。

以下の記事は、約1時間にわたるお話を、いくつかのまとめりに要約したものです。

草の根交流に力をいれている

私たちの GCOE は、医学系、理学系に加え、分生研（分子細胞生物学研究所）まで、広い範囲の部局をカバーしています。理学部の中でも、生物科学専攻と生物化学専攻はすこし文化が違うようですが、そのどちらにも参加してもらっています。

ただ、東大の生命科学系の全部をカバーしているわけではもちろんありません。医学系の中でも参加していない研究室もありますし、薬学系や農学系で分子細胞生物学を研究している研究室が入っていないことは、今後の課題だと思います。

とはいうものの、GCOE に参加している方たちとは、学生さんを含め、話す機会が相当増えました。これは、大変いいことだと思っています。

海外との交流

21世紀 COE の時にはなくて、グローバル COE になってから体系的に動いているものに、UCSF（University of California, San Francisco）や NIH（National Institute of Health）へ大学院生を派遣する事業があります。

海外とのつながりを教官の個人的な伝に頼るのではなく、先方の海外担当部局と協力して、体系的にできるようになったのは、21世紀 COE からの大きな進歩です。

もちろん、最初は大変でした。リトリートの会場は、自分で車を運転しなければ行かれないような場所なので、現地でのサポートも重要です。このため、現地のオフィスに担当者を常駐させています。こうした仕組みを開始から2年半で整えることができ、今はマニュアル化されて動いている部分が多いので、相当楽になりました。

海外から学生さんが来ることもあります。

こちらから学生さんが行っているのは、UCSF や NIH だけですが、向こうから来る場合は、

ハーバードやイギリスの UCL (University College London) さらに、韓国を含めたアジアも含まれています。

学内での活動

日常の講義や実習は、それぞれの部局横断的にルーチンワークとして機能しています。それとは別に、学生さんも含め、3月のはじめに関係者が一堂に会するリトリートを開催しています。平成 20 年度は、参加者 478 名でポスターは 295 演題でした。教官を含め、全員集合して 2 日間、夜はお酒を飲みながらやっていますので、日頃は直接話す機会がないような先生方と、いろいろな議論ができます。

普通は聞きにくいようなことも聞けるというのが重要で、たとえば女性の学生が、女性の生命科学系の教授にキャリアパスについて相談したりするには絶好の機会です。医学部の周辺には、女性の教授が少ないので、よいロールモデルがあまりありません。ですから、プライベートな話も交えて女性の教授の話が聞ける機会はなかなかありません。

こうした取り組みは、生命科学ネットワークでやってもおもしろいかもしれないですね。女性というターゲットの絞り方も、最初の試みとしてはいいのでは無いかと思います。たとえば、生命科学ネットワークでも、毎年シンポジウムを開催していますが、この懇親会をもう少し拡大して多くの学生さんたちを招くと良いかもしれません。

すべてがうまくいっている事業ばかりではありません。

油壺にある東京大学三崎臨海実験で行われる、理学系の生物科学のコースを開放してもらっていますが、どうも医学部の学生さんには、積極的に参加してもらえません。

単位の互換性制度の確立や、宣伝は十分しているので、学生さんの意識の問題だとは思いますが、企画自体に無理があるのかもしれないので、今後検討が必要かとは思っています。

* 他の大学との交流もおもしろい

今年の 2 月に、国内の全生命科学系 GCOE の人々が集まるフォーラムを開催しました。国内の GCOE が横につながる仕組みはこれまでありませんでしたので、個々の GCOE からのボトムアップの活動でしかはじめられないと考え実行しましたが、想像以上に有意義でした。将来的には、予算などがついたきちんとした活動になるといいと思います。

今年は、東大が音頭をとりましたが、来年は、京大、阪大、奈良先端大学の共同で開催することが決まりました。

他の大学の人が、どんな研究をしているのか、face to face で見られるのはとても貴重です。学会で学問の議論はしますが、それとは少し違った、パーソナルな議論ができたことが良かったと思います。

GCOEとセミナー

GCOE では、週に 1 回くらいは様々な方を招いてセミナーをやっています。ところで、生命科学ネットワークでは、セミナー情報共有 Web ページを作っていました。システム化はされていませんか？私たちの GCOE セミナーも、全部が公開できるものでもありませんので、たとえば東京大学全体で、セミナー情報共有の基盤を作って、載せられるものは載せるというように、システム化した仕組みができると良いと思います。

GCOEと大学院生

GCOE は当初、国がその制度を設計したときに、博士課程の学生しかターゲットに入っていないませんでした。これは間違っていたと思うので今後は改善の必要があります。修士課程の学生さんは視野の外だったので、これは運用でカバーしています。学部の学生さんの扱いは難しいところがありますが、少なくとも、修士課程の学生さんは、研究者育成のシステムに乗せられるよう制度を変更するべきです。

こうしたことも含め、生命科学ネットワークが、学内の学生さんへ意見を聞いてみるのもおもしろいと思います。彼らがどのようなことを望んでいるのかがわかると良いですし、少なくとも、生命科学ネットワークが編集している生命科学の教科書については貴重な意見が得られるのではないのでしょうか？

教科書の作成

先日、立花隆さんとお話する機会があつて、私が専門とするニューロサイエンスでも、東大の生命科学の教科書のような本を書いたらどうですか？と勧められましたが、非常に骨が折れることがわかっているので躊躇してしまいました。生命科学ネットワークで作成した教科書は、多くの先生方が集まって生命科学構造化センターなども協力し、相当の労力でつくっているのですから、なかなか真似はできません。

学術研究の将来

たとえば、ニューロサイエンスでは、近年、研究者の学問背景に境界がなくなりつつあります。分子生物学的な側面から研究している研究者と、人文科学、社会科学の研究者が対等に意見交換します。

学内の GCOE にも、死生学という分野がありますが、将来的には、科学技術という意味をもっと広くとって、異分野とのつながりを模索していくことは必須だと思います。そうい

った意味で、総合的な意味での、学術（Science and Arts）という視野がどのように将来発展していくのか個人的には非常に興味があります。

そうはいつでも、自分の専門は深くなければなりません。学問的な力量こそ、すべてを動かす最初のパワーになります。圧倒的にサイエンスとしては優れているからこそ、私たちの GCOE も、様々な活動がうまく回っているのだと思います。



インタビューを終えて

「酒井」お忙しい中、インタビューを受けてくださった宮下先生。

教育・国際交流を絵空事ではなく「制度化」しているのがすごいと思いました。さらには、他大学の GCOE との交流も、主導しているとのこと。「このようなイニシアチブをとるには、圧倒的にサイエンスとして優れている必要があるんです。」と、にこやかな面持ちの中にも、自信をみなぎらせた言葉が、印象的でした。

「辻」

科学が進むと全人類が保有する知識が増える分、一人の人間がカバーできる領域は狭くなるわけで、新たな発展の糸口を GCOE やその連携を通じて模索している宮下先生のプロジェクトは、生命科学ネットワークのような部局横断型の組織が、学術分野の発展のためにできることを見つけるための、よいお手本になるのではないかと思います。